

『私の趣味 宋代の詩—蘇軾(蘇東坡)と陸游』

はじめに

私は生来、いたって無趣味で、アンケートなどで「お前の趣味は何か」と聞かれるのがたいへん苦手です。それでも勤めていたころは、つき合い程度のゴルフや麻雀を一応趣味と思い楽しみましたが、人様にいえるレベルではありませんでした。ゴルフの朝、練習場に向かおうとすると、「変わらないと思うよ」といわれたり、東海道線で熱海の先に1泊のグループ旅行へ出かけた時、「鴨宮駅」を通ると、「あっ、小池さんの駅だ」と叫ぶ者がいて大笑いされたものです。その晩は雀卓で、翌日はゴルフ場で奮起して優勝すると、「鴨の宮が怒った」などとまた笑われたのも懐かしい思い出です。

ただ、趣味というよりも習慣となっているのは読書です。ほとんど乱読ですが、日常生活とは別の世界をみることのできる精神のバランス剤と思っています。

こういう私が、この「私の趣味」のページに掲載するのは非常におこがましいのですが、昨年、中国は南宋時代の詩人、「陸游」の評伝を自費出版しましたので、それに関連して、宋代の2大詩人、北宋を代表する蘇軾(蘇東坡)と南宋を代表する陸游をとりあげてみようと考えました。わが国では、古くは陶淵明や唐詩の李白、杜甫、白居易(白樂天)などはよく知られているものの、宋の詩は馴染みが薄いと思いますので、ご一緒にみていきましょう。

なお、漢詩は原詩を省き、訓読(日本語の読み)のみとしました。

1. 宋の時代

はじめに宋の時代を概観しておきます。宋代は、中世以降の隋、唐、五代十国、宋、元(モンゴル族)、明、清(満州族。後記女真族の後裔)と続く19世紀までの中国王朝史の中で、農業、商業などの経済発展が著しく、内乱が少なく、珍しく安定した、文化的で平和な時代でした。民衆の生活水準も飛躍的に向上しました。

王安石の改革、朱熹(朱子)の思想、書画や磁器の盛行などが特記されます。また宋代の火薬、羅針盤、活版印刷の発明は、漢代の紙の発明と併せて、中国の4大発明として後世に大きな影響を与えました。こうして宋代は、中国王朝史の分水嶺であり、偉大な、創造的な時代であったといわれています。

しかし、つねに北方の異民族(女真族の「金」国など)の侵攻に悩まされた時代でもあります。歳幣(毎年の金や財物)で懐柔しましたが、結局、北宋(960~1127年)は金に滅ぼされ、南宋(1127

～1279年)は、領土の半分近くを金に奪われたまま建国したような状況でした。

2. 蘇軾(蘇東坡)(1036～1101年、北宋時代。現四川省の人)

蘇軾は、詩人であるほか、名文家として「唐宋八大家」に父蘇洵、弟蘇轍とともに名を連ね、また書家、水墨画の画家でもあったという、たいへん多才な人です。中華料理の「東坡肉」(豚の角煮)も、蘇軾の詩(「猪肉を食らう」)にもとづく命名だそうです。

官僚の登竜門である科挙には、弟と若くして揃って合格し、順調に官僚の道を歩み始めましたが、後に時流に翻弄され、栄進、左遷、復歸、流罪と波乱に満ちた生涯を送りました。

しゅんしょう 一刻 ちんぎん
春宵 一刻 値 千金

花に清香有り 月に陰有り… (「春夜」)

これは、蘇軾の詩句の中でもっとも知られているものではないでしょうか。蘇軾は気軽に人につき合い、人気がありました。詩も自由闊達な人柄を反映しているといわれます。こちらは「春の宵」、唐代の孟浩然には「春眠 暁 を覚えず」の「夜明け」の句がありますね。

…吾が生の須臾なるを哀しみ

長江の窮まり無きを羨む… (「赤壁の賦」)

須臾はほんの短い時間。蘇軾が47歳、三国志の赤壁の戦いで名高い、長江の赤壁に遊んだ時の文章です。その3年前、蘇軾は朝廷を誹謗する詩を詠んだとして獄につながれ、一時は死罪を覚悟しました。しかし仲の良かった弟の蘇轍が官職の放棄を条件に兄の赦免を嘆願し、許されて二人とも流罪になりました。この時はまだ流謫の身でした。こうした背景を考えますと、短い人生と長江の悠久の流れの対比が、いっそう際立ってくる気がいたします。

3. 陸游(1125～1209年、南宋時代。現浙江省の人)

この陸游の名は知る人ぞ知るで、私も20数年前、ラジオの漢詩講座を聴いて初めて知りました。宋の詩人では、蘇軾は知っていても、陸游は知らないという人が大半かと思います。

その陸游は、南宋を代表する詩人として、愛国、情愛、自然の詩が有名です。生涯に作った詩の数が1万首を超え、他の詩人に例を見ないばかりか、一首たりとも粗造、乱造の印象がないといわれます。さらに文学や歴史、儒教思想などの学識が深く、随筆や論文も並外れて高い水準にあると評価されています。



私が陸游の生涯を本にまとめようと考えたのは、終生、金に対する主戦論を信念とし、最初の妻唐琬への追憶、隣りの農夫から宰相(首相)となった昔の同僚にいたる交流などを通じて、強く、積極的に生きた姿に共感を覚えたことにあります。

夢は断え 香は消えて四十年
沈園 柳老いて 綿を吹かず…
(「沈園」)



沈園 (中国浙江省観光局提供)

陸游は20歳の時、母の姪である唐琬と結婚しましたが、なぜか母に嫌われ、2年ほどで離別させられます。陸游はその後別の女性と結婚しますが、離別の10年後、花見に訪れた沈氏の名園で、偶然、唐琬との一瞬の再会を果たしました。

まもなく唐琬が亡くなったことを知って、長く唐琬を憐れみ、死の前年、84歳の時まで追想の詩を作りました。この詩は75歳の作です。

一方、3度目に受験した科挙では、優秀な成績をあげながら、たまたま時の宰相秦檜の孫が同じ試験を受けており、それが陸游より下位におかれたことから、激怒した秦檜により落第とされてしまいます。後に官途につきますが、地位に恵まれず、生涯をほとんど地方官として過ごしました。

この二つの青春の挫折があり、また「不如意(意のままにならない)の事 常に千万」と詠んだとおりの人生でしたけれども、陸游は終始、楽観的に、時には奔放に生きた人でした。

…楼船 夜雪 瓜洲の渡
鉄馬 秋風 大散関… (「憤りを書す」)

名詞だけを並べて助辞を使わず、調子が高く、読者のイメージをかきたてる有名な対句です。陸游は対句の名手でした。楼船と鉄馬(甲板にやぐらを組んだ軍船と鉄のよろいをつけた馬)、雪と風、冬と秋、瓜洲の渡(渡し場)と大散関(ともに金と対陣する軍事上の要衝で、陸游が関わった地)、これらの対比がじつに見事です。陸游62歳の作。この詩にみるのは、いつまでも金を伐とうとしない政府への憤りと愛国心の発露です。

…共に説く 向來 曾て我を活かす
児を生みて 多く陸を以て名と為すと
(「山村を徑行し、因りて薬を施す」)

81歳の作。陸游は薬草の知識があり、自宅に栽培して、薬として山村の農民らに施していま

した。口々に、こうして生きてられるのも先生のお蔭、大勢の者が生まれた子に陸の字をもらって名をつけました、といわれて喜んでいきます。無医村の巡回医師のような役割だったのでしょう。陆游の嬉しそうな顔が浮かぶ光景です。



いかがでしたでしょうか。以上は宋詩のほんの一端にすぎませんが、多少とも楽しんでいただけたら幸いです。

平成27年4月 小池 延俊